

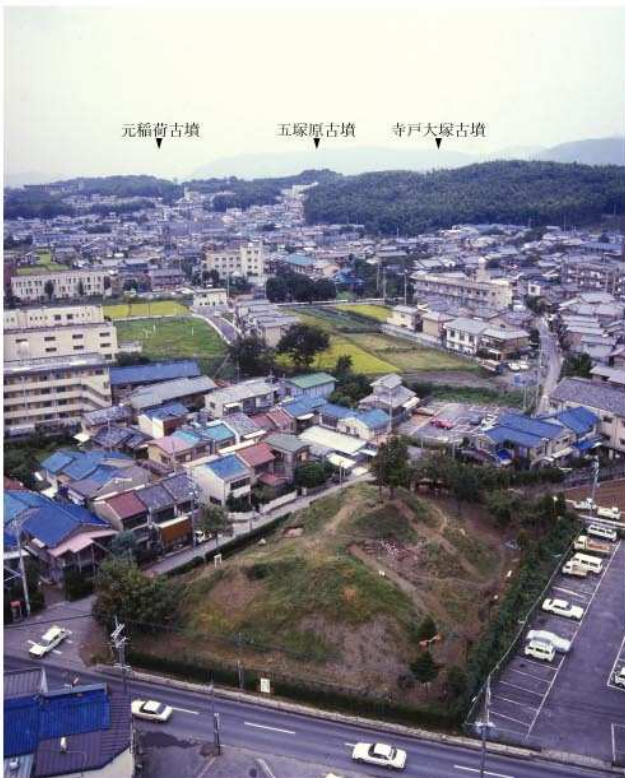
## 物集女車塚古墳とその時代

物集女車塚古墳は継体大王の時代に造られた6世紀中葉の古墳で、王権を支え大王近くで仕えた有力豪族の墓です。墳丘は約46mの規模を有する前方後円墳で、斜面には葺石を施し途中に平坦面を一段設けて段築成が採られ、そこに円筒埴輪をめぐらせています。埋葬施設には6世紀初頭に成立する「畿内型」の横穴式石室が築かれています。

継体大王が葬られた今城塚古墳は墳丘長約190mで全国最大規模になり、大王家と婚姻関係を結んだ地方の有力豪族や拮抗する政治勢力は、「尾張連草香」墓の断夫山古墳(150m)を最大にして100m級、以下政治的親縁関係に基づいて70m、40m、20m前後の規模にまとまる傾向があります。段築・葺石・埴輪の三点セットに加え、「畿内型」石室の採否など古墳を構成する要素に格差が顕著に表わされています。

「畿内型」石室は継体王権の政治支配・人臣統合の象徴として身分的な序列を明確に示すために創出された墓制で、棺の種類と玄室空間の大きさの違いをもとに規格化され秩序をもって畿内を中心に波及していきました。この規格でつくられた石室は王権が掌握する最先端の高度な技術が使われており、王権に参画しさまざまな職掌を分担する畿内の有力者と同盟的關係を結び得た各地域勢力が共有することができた王陵の系譜を引く埋葬施設といえます。このような関係を結び得なかった政治勢力は、王権との距離にしたがい一定の規制を受けた上で独自に技術を獲得して構築するほかになくそれが各地に特有の石室を生み出すことになりました。

継体王権は中小の地域勢力や技術集団、村落の代表者など末端に至る階層までも直接的に掌握し、支配を貫徹させるための政治手段として古墳造営を義務化させたと考えられます。物集女車塚古墳が造られた時代は、古墳造営に体现された身分的な階層秩序の再構築が厳格に断行され、横穴式石室や群集墳の爆発的な築造を促すことになったところに大きな特色を見いだすことができます。

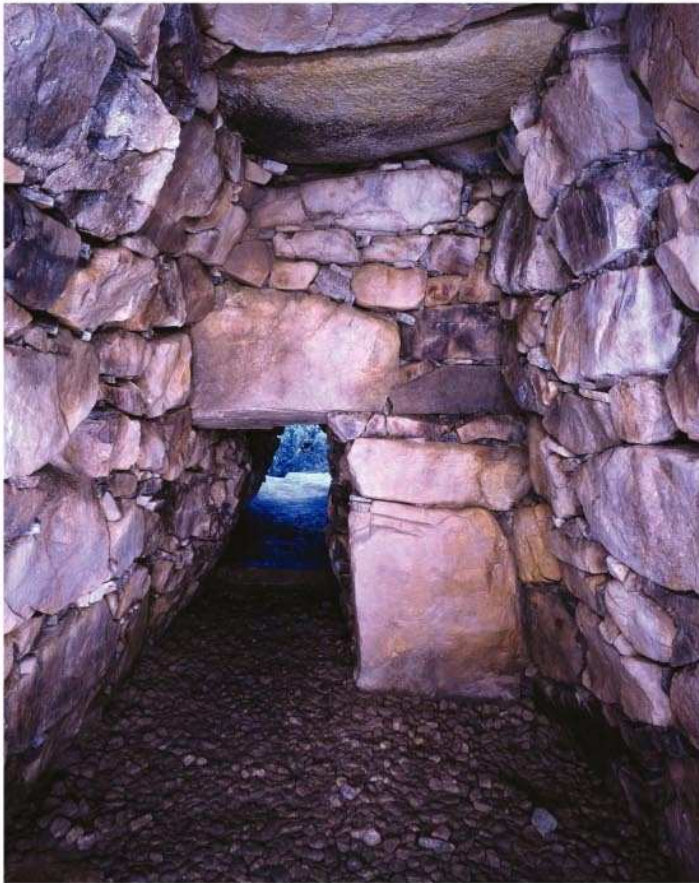


物集女車塚古墳の立地と墳丘（北東から）



玄室の側壁・奥壁の構造と石棺配置の状況





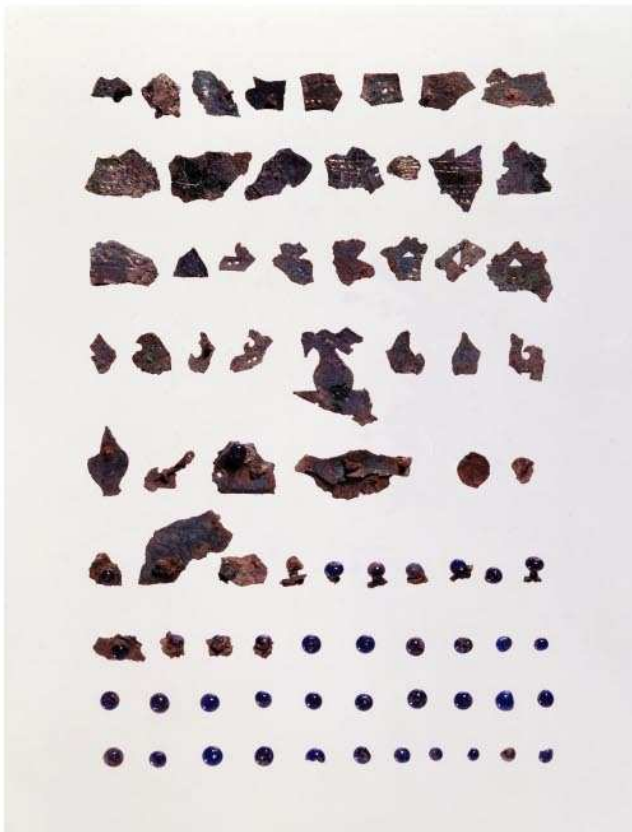
玄室前壁と袖石、羨道の構築状況

### 出現期の「畿内型」石室の特徴

「畿内型」の特徴は棺を納める玄室空間の平面が長方形で、天井は平坦となり玄室入口に袖石を置いて、均一な幅の羨道をもつところにあらわれています。また、羨道奥側の床面には石材を置いて段差が設けられ埋葬空間と通路を区別し、この直上に礫を積み上げて閉塞していました。

### 物集女車塚古墳の特徴

羨道に対して玄室が高く、袖石の上ののせる前壁は3段積みとなります。玄室壁面は5段積みで、1段分の積み上げに上下2石を置く箇所が多いなど全体的に大小の石材が混在しています。玄室の基底石は小ぶりで横に長いものを使用する傾向が強く、壁面は内傾させながら立ち上げ、大型の石材を上部に置いて背後の控えを長くとり安定させています。床に設けられた石組みの排水溝は横穴式石室に採用が始まる初期の事例となります。



### 冠の断片と装着していたガラス製小玉

金銅製宝珠文形立飾付二山式帯冠で、鉄製鋌に溶解したガラス塊を巻き付けて装着する。



### 被葬者の威勢を示す副葬品

f字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・三葉文楕円形杏葉などの金銅装馬具の優品が際だつ。